

青い波北陽台

令和7年1月30日 発行
長崎県立長崎北陽台高等学校
西彼杵郡長与町高田郷3672
TEL 095-883-6844
FAX 095-883-0776
発行責任者 大川 周一

『For others』

校長 大川 周一

今年には戦後そして被爆80年という大きな節目の年となるが、米国トランプ政権の再登場や欧州主要国の政治体制が揺らぐ中、世界秩序は再編の時代に突入し、思いがけない出来事が次々と起こる歴史の変動期の只中にあると言われている。年頭に当たっての新聞各社の論説等を読んでも、危機的な財政、生成AI導入に伴う産業構造の大転換、流動する国際情勢など、厳しい現実を直視し、国民全体が他人任せにすることなく、新しい日本の再生に向けて立ち上がるべき年である、という論調が目立った。なかでも、目を引いたのは「責任感」と「共生」という二つのキーワードである。

全体よりも個人の目先の利益を重視する風潮がはびこり、個人としても、また国としても担っているはずの責任や役割を積極的に果たそうという意識が、我が国の社会全体の中で希薄になってきている。自分のことはさておき、他人ばかりに無理な要求をする人が多過ぎるのではないか。他人に要求することをまず自分に要求してみてもどうかとも思う。日本再生のためには、責任感のある社会構造こそ急務であるとする多くの主張には、ごみ問題の一つを考えてみても十分な説得力があるように思える。

最近、ほとんどのコンビニでは、ごみ箱を店内に移設している。理由は車内ごみの廃棄など不法投棄が後を絶たないからである。以前は、店舗の外で口からあふれそうになっているごみ箱の前に、早朝から火鉢を持った店員さんが分別に汗を流されている様子をよく見かけた。「人の目がないから」「自分一人ぐらいなら」という気持ちをいかに抑えられるか、ごみ問題を解決する出発点は、やはりそこにあるように思える。

次に「共生」であるが、これは「異なる種類の生き物が互いに作用し合いながら同じ場所で生活する」という定義から派生して「自然や人を含めた生き物が、共に所を同じくして助け合いながら生活する」とことと解釈されるもので、ここでは後者の意味である。

「4、5歳の子が小さな両手を差し出した。私はそっと手持ちの飴玉を二つ渡す。その一つは自分、もう一つはもっと痩せた子に分け与えた。」紛争地域の難民救援に参加した日本人医師の話である。飴玉が一つしかない時は、歯で割って仲間と分け合って食べる。物資が滞ると難民キャンプの食事は一日一回、栄養失調を起こす子供も多いそうである。この話を読みながら、「己を抑えて人に譲る」という能力が地上に人類の出現を可能にした、というある学説が頭に浮かんだ。農林水産省によれば、昨年日本のフードロス約472万トン、国民一人当たりで一日約103g（茶碗一杯分のご飯量）が廃棄されているようだ。世界中ではびこるMeism（自己中心主義）に、文明の皮肉を想わずにはいられない。

ちなみに、小泉八雲（Patric Lafcadio Hearn）が次のような警鐘を鳴らしたのは120年以上も前のことである。「生存コストが高価な種族は、その結果として消滅する。自然は偉大な経済家であり、決して間違いをしない。生存の適者とは、自然や他者と最もよく共存できて、わずかなものに満足できる人々のことであり、これが宇宙の法則である。」

このことは、3学期始業式の講話でふれた「吾唯足知」（京都の龍安寺にある蹲に刻まれた4文字）の意味にも繋がるものである。日本が激動する世界の荒波に呑み込まれず、新しい秩序の形成に力を発揮していくために、今を生きる私たち一人ひとりには、責任ある行動と共生の精神を意識した生き方を忘れてはならないのであろう。

文理探究科1年「冬季研修」

12月25日(水)に文理探究科1年が冬季研修を実施しました。2年次に国際探究を選択する生徒たちは、長崎歴史文化博物館、日本銀行長崎支店、十八親和銀行にて研修を行い、長崎とオランダ文化や金融リテラシーについて学びました。また、理数探究の生徒たちは、長崎総合科学大学にて「医療機器」「スマホを用いたプログラミング」「ロボット制御」から選択した講座を受講し、ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング(株)にて工場見学をさせていただきました。歴史や文化、銀行と国際経済や最先端の科学技術に触れたことで、自らの将来の選択肢を広げることにつながったようです。



長崎総合科学大学での研修の様子(ロボット制御講座)



長崎歴史文化博物館での講演



日本銀行・十八親和銀行での研修の様子

駐日ポルトガル臨時代理大使講演会

1月24日（金）3・4校時に、駐日ポルトガル臨時代理大使 Mr. Tiago de Brito Penedo（ティアゴ・デ・フリット・ペネード氏）が来校され、1，2年文理探究科約160名の生徒を対象に講演が行われました。

今回の駐日大使来校は、令和5年6月に長崎県とポルトガル政府が連携協定を締結したこと契機に、つくば・東京研修旅行で文理探究科1期生と2期生の合計25名がポルトガル大使館を訪問させていただいた縁により、実現しました。

鬼塚修さん・樋口愛子さん（2年生）の進行で開会しました。講演に先立ち、大使館訪問生徒が、「食文化・芸術・歴史・祭り」の4つのカテゴリーに分かれて、ポルトガルと日本の関係についてプレゼンを行いました。研修旅行で学んだことをもとに、自分たちでも色々調べながらまとめた内容です。短期間での作業、しかも英語プレゼンということでしたが、できる限り最高のパフォーマンスをしよう、と皆で取り組みました。

プレゼンの後は、いよいよメインイベントである講演です。タイトルは、“PORTUGAL: Diplomacy and Cultural Dialogue”。歴史を紐解

きながら異文化の重要性に触れ、ポルトガル外務省の歴史や役割、外交官のキャリア等にまで及ぶ内容に、皆、聞き入っていました。講演後の質疑応答では、「なぜ外交官になろうと決めたのですか」「ポルトガルの国旗にはどのような意味があるのですか」など、次々と手が挙がり、グローバル社会に対する興味・関心の高まりがうかがえました。

駐日大使との交流という貴重な体験を通して、生徒たちは、直接自分の将来にどのような影響を及ぼすのか今は明言できないけれども、何かしらの余韻を感じながら会場を後にしたのではないかと思います。



Mr.Penedo 駐日ポルトガル臨時代理大使

今回の大使訪問の実現に関してご尽力いただきました方々に、心よりお礼を申し上げます。



令和6年度 百人一首大会

令和7年1月9日(木)の午後、第1学年を対象に本校開校当時の伝統行事である「百人一首大会」が体育館で行なわれました。この大会は全員が参加するバラ取り戦と、各クラスの代表者2名による源平戦(名人戦)で競技されます。教頭先生、1学年団の先生方、そして放送部による名調子の朗詠を聞きながら、緊張感ある真剣な勝負が繰り広げられる中でも、時折、生徒の笑いや歓声も溢れるような和やかな大会となりました。

結果は次のとおりです。

第1位 6組

第2位 2組

第3位 7組



バラ取り戦



源平戦

2月の主な行事予定

- 6日(木) 3学期定期試験(1・2年) ~12日(水)
- 8日(土) 校内オープン(3年)
- 13日(木) 個人写真撮影(1・2年)
- 15日(土) 校内オープン(3年) 対外模試(2年) ハイレベル模試(1年)
- 16日(日) 対外模試(2年)
- 17日(月) 特別編成授業終了
- 18日(火) 入学者選抜(一般選抜) ~19日(水) 生徒登校禁止
- 20日(木) 生徒登校禁止
- 21日(金) 生徒校舎立ち入り禁止
- 22日(土) 学校開放(3年) ~23日(日)
- 25日(火) 代休(3/1分)
- 26日(水) 福岡県立新宮高校との交流学習会(2年文理探究科・理数探究)
- 28日(金) 卒業式予行 表彰式 記念品贈呈式
理数科閉科式 同窓会入会式



生徒会

各種大会の成績を報告します

各種大会の主な成績を紹介します

ラグビー部

第104回全国高等学校ラグビーフットボール大会

1回戦 長崎北陽台56-19 城東(徳島県)

2回戦 長崎北陽台12-44 大阪桐蔭(大阪府)

弓道部男子

第43回全国高等学校弓道選抜大会予選敗退【本間】

全国大会に出場した選手のみなさん、感動をありがとうございました！

吹奏楽部

第51回長崎県アンサンブルコンテスト 金賞



おめでとうございます！

柔軟性のある年に

1学年 旗生 玄章

新年を迎えてどのような気持ちですか？入学してあっという間に9か月経ちましたね。その中で、上手くいったことより上手くいかなかったことのほうが多かったと思います。1年生3学期は2年生0学期と言われます。この9か月経験したことを糧に4月を迎えていきましょう。

さて、今年は巳年です。私も生徒の皆さんも柔軟性のある年にしていきたいものです。そのためには他者理解に努めることが大切です。当然、考え方や性格が異なる様々な人間が同じ空間にいるわけですから衝突が生まれると思います。その時に、他者理解の気持ちがあるとなぜその衝突が生まれたのか、相手はなぜそのような発言や行動をしたのかがわかってくると思います。曲げられない自分の軸を持つことは何よりも大切ですが、柔らかな精神を養っていくことも大切です。

お互いに日々、少しずつ成長していきましょう。より良い1年となりますように。

シンガポール修学旅行を終えて

2学年 下村かおり

今年のシンガポール修学旅行も全行程を終え、全員無事に帰国しました。出発時には積雪の影響で急な変更があり、B団の保護者・生徒の皆様には大変なご負担をおかけしました。到着後、生徒たちは、マーライオン公園やマリーナベイサンズなどの美しい景観に感動を覚え、また、市内やセントーサ島での班別自主研修では、自分たちで計画した行程を実践し、充実した時間を過ごすことができたのではないかと思います。

今回の海外修学旅行にはどのような意義があったのでしょうか。次のことが考えられそうです。

- ①海外の空気を肌で感じ、日本とは異なる文化や価値観に直接触れることで、世界にはさまざまな人々がいることを実感し視野を広げることができる。
- ②現地の人々と英語で会話することで、語学力だけでなく、伝える力・聞く力といったコミュニケーション能力を高めることができる。
- ③自分たちの計画に従って行動し、時には予期せぬトラブルにも対応するという経験を通して、自信が生まれ、チャレンジ精神を育むことができる。
- ④日本の良さや課題を客観的に見つめ直すきっかけになる。

悪天候にも負けず、バスやMRT（地下鉄）を利用して様々な場所を訪れ、買い物を楽しんだり、ホテルのフロントで直接用件を伝えたり、と積極的に行動する45回生の姿は大変頼もしく感じられました。

45回生の皆さんはこれから進路選択という大きな節目を迎えます。修学旅行で培った挑戦する姿勢を活かし、自分の目標に向かって力強く歩んでください。日本の外には、まだ知らない文化や価値観、人々の暮らしがあります。シンガポールで芽生えた皆さんの好奇心がこれからも広がり続け、新たな出会いや挑戦につながることを願っています。